

「人を大切に する」 二人の恩師から学んだ 教育の原点

神奈川県横浜市立野庭^の中学校校長 榮修吾 SAKAE SYUGO

教師は日々、さまざまな働き掛けの中で生徒を育てる。そして教師は、共に働く仲間との出会いの中で育っていく。出会いから学んだ教育の原点、そして次代を担う若い世代に伝えたい不易を、榮校長が語る。

教師が元気だから
生徒も元気になれる

横浜市立六浦中学校は、私が副校長になって初めて赴任した学校です。そこでお会いした二人の恩師から、私は教師として、そして管理職としての在り方を学びました。

2004年、六浦中学校で堀内早苗校長とお会いしたときの私は、自分はこれから何をすべきなのか、はつきりとは分かっていませんでした。教師を管理するのが仕事……今思えばそんなふうにはイメージ出来ていなかったかもしれません。

堀内校長は生徒にも教師にも愛情たっぷりの母親タイプでした。多くの先生が堀内校長を慕い、宴席でつい「おっかあ！」と叫んでしまう先生もいました。「この学校は『六浦一家』だ」と言う人もいたほどで、まさに家族のようなまとまりでした。

当時、六浦中学校は生徒指導上の課題も抱え、決して楽な学校ではありませんでした。しかし、先生方はとても前向きで、元気でました。日々、粘り強く生徒と向き合って、生徒自身の気づきを待っていました。

六浦中学校の先生方と働くうちに、私は「教師が元気でなければ、



さかえ・しゅうご 専門は国語科。1982年に横浜市立寺尾中学校へ。以来、横浜市立富岡東中学校、横浜市の研修制度による民間企業での研修などを経て、2008年度より現職。学校ホームページでWeb日記「校長室の窓」をほぼ毎日更新中。

1973(昭48)
中学校の恩師の影響で
教師を志す

1982(昭57)
横浜市中学校教員に

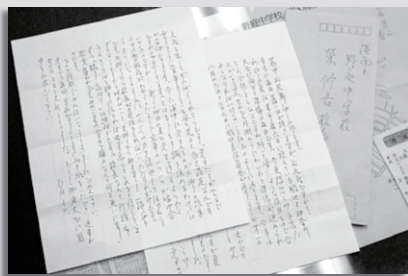
2003(平15)
市の「民間企業派遣研修
(長期)」で市内大手書店
に勤務

2004(平16)
副校長として
六浦中学校に赴任



卒業式の日
堀内校長(右)、
PTA会長(中)と

2008(平20)
野庭中学校校長に



昨年、間邊校長から頂いた手紙は校長室の机にいつもある。「一人ひとりの教員を信じて任せればいい」。尊敬する大先輩の言葉が榮校長を見守る

生徒も元気にならない」と気が付きました。教師がまとまっていて、温かい気持ちでいられる学校をつくること……管理職としての自分の役目が分かった気がしました。

人を信じて人を育てる それは教師も生徒も同じ

堀内校長とご一緒したのはわずか1年でした。異動を知ったときは寂しかったですし、次の校長はどんな方だろうと少し不安もありました。

05年に着任された間邊^{まなべ}光夫校長は、ずばり父親タイプでした。間邊校長のスタンスは「人を信じて、人に任せる」。相手が自信を持っている部分を見付け、それを全面的に信頼し、その人の力を引き上げていく。考えてみれば、私たち教師は、

日々子どもの長所を認め、伸ばそうとしているのに、大人同士となるとなかなか簡単ではありません。しかし、間邊校長はそれが自然に出来るのです。

間邊校長は強力なリーダーシップも発揮しました。例えば、地域のお祭りに全校生徒が学校行事として参加するようになった時のことです。万一事故が起こったときの対応など、さまざまな検討課題が浮かび上がり、実施までの道のりは平坦ではありませんでした。が、間邊校長は「生徒と地域のためにやろう。何かあったら責任は自分がとる」と決断されました。このほかにも「あなたの思うとおりになりなさい。責任は私がつとるから」と言われたことは何度もあります。

私たちのことを信じて任せてくれる間邊校長に対して、「必ず信頼に応えよう」「この人のために頑張ろう」と私はいつも思っていました。

教師の人間的な魅力が ますます問われる時代に

二人の校長から私が学んだことは、人を大切にすることです。そして私は、校長によって学校

「おごりたかぶることなく 自分を磨き、生徒と向き合いたい」



は変わるのだということも学びました。一人ひとりの教師の良さを認め、直接子どもと接する先生が働きやすい環境をつくるのが、校長の一番の仕事であり、それによってきつと学校は変わるはずですよ。

でも、校長となった今でも子どもたちと触れ合いたいという気持ちは変わりません。私はそのために教師になったのですから。校長として、教師として、自分の立ち位置をまだまだ模索しています。

今後、公立中学校では生徒の多様化が更に進むでしょう。それを公立中学校の魅力として、生徒同士の学び合いの中で実感させる。それこそが公立中学校の使命です。そのために、教師には人間的な魅力が問われます。教師だから、校長だからとおごりたかぶることなく、自分を磨かなければ生徒と向き合うことは出来ません。お二人のように人を信じ、自分を高めていきたいと思えます。